

巻頭言
Greeting

×

小林 久実
Hisami Kobayashi
聖書神学舎 講師・理事
(奈良福音自由教会牧師)

Profile

1959年秋田県生まれ。大学と大学院で有機化学を専攻。聖書神学舎30期卒。埼玉県で3年余、京都市で19年余の牧会の後、2011年から奈良福音自由教会牧師。1997年度から講師(弁証論II)。2021年より理事。



聖書神学舎での特別講義

ある「祈りの日」のチャペルで、研修生だった私は普段とは違う貴重な学びをしました。「神のことはあなたがたに話した指導者たちのことを、覚えていなさい。彼らの生き方から生まれたものをよく見て、その信仰に倣いなさい」(ヘブル 13:7)を思い出しつつ、まとめてみました。

今でもそうでしょうが、祈りの日には授業はなく、チャペルと食事以外は、ひたすら祈りに集中するというプログラムでした。チャペルの説教者には、外部講師が立てられます。その日もチャペルの時間が近づき、研修生と教職員が一堂に会していました。ところが、講師がなかなか到着しませんでした。携帯電話がない時代のことです。司会の研修生が事務室に駆け込んで、講師の先生が牧会する教会に電話をかけたところ、少し前に車で出発したと分かりました。そこでその研修生は、気を利かせ、会衆にこう提案しました。「講師の先生はこちらに向かっていますが、何らかの事情で到着が遅れています。一旦解散して、30分後に再び集まりましょう。」

しかしその時、やや後方に会衆として座っておられた舟喜順一先生がずっと立ち上がり、大きな声でこう言われました。「私たちは今、礼拝のためにここに集まったのです。講師が来ないという人間的な都合のために、時間を変更すべきではありません。テキストとなっている手紙の全体を司会者が読んで、礼拝を始めなさい。」

私は、一瞬「そんな無茶な」と感じましたが、すぐに我に返り、自分の浅はかさを恥じました。確かに、人間側の都合を、私たちを礼拝に招いてく

ださる神様よりも優先させてはなりません。礼拝の大切さを頭では分かっているつもりでしたが、知識だけでは不測の事態に対応できませんでした。順一先生は、とっさの機会を用いて、礼拝が何であるか教えてくださったのです。

幸いにして講師の先生は間もなく到着されました。手帳に間違って1時間遅い時間を書き込まれたことが原因でした。それでも、十分に余裕をもって到着しようとしたので、影響は最小限でした。丁寧なお詫びの後、何事もなかったかのようにチャペル・メッセージが始まりました。

聖書神学舎の創立者のお一人である順一先生からは、いくつもの講義も受けましたし、個人的にも親しく交わっていただきました。ただ、この時に教えられたことが、強烈な印象として私の中に残っています。とっさの時にこのように語れるということは、聖書の教えが先生の中に生き生きと保たれていたことを示しています。

創立以来の変わらない姿勢、「みことばに仕える」ことを、私は先生方から教えられました。それはみことばを分析するだけでなく、その結果を統合し、みことばに生きることです。変わりゆく世の中で、変わらないみことばに仕えることを、自分の中に根づかせると同時に、次世代へと伝えていく必要があります。これがいつまでも確実に受け渡される神学舎であってほしいと願います。

No.197 Topics

- p03 学びの窓
- p04 夏期研修講座
- p05 教会音楽夏期講習会
- p06-07 キャラバン報告

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書神学舎 校長

「『私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。…私が気前がいいので、あなたはねたんではいるのですか。』このように、後の者が先になり、先の者が後になります。」

マタイ 20 章より

恵みを数えて

前回通信の発行後も、特別講義と集中講義期間、聖書神学舎デイに夏期研修講座に教会音楽夏期講習会と、働きが続きました。恵み豊かな主に支えられて、祝福を数えています。本紙 4,5 頁で祝福の様子を読み取ってください。

研修生の夏期伝道実習では、3 つのキャラバンチームが各地で奉仕しました。受け入れてくださった各教会に感謝します。詳細は、6,7 頁の報告・証しをご覧ください。これら以外にも、各々の奉仕教会や母教会、あるいは超教派のキャンプなどで、普段とは違った経験と訓練にあずかりました。卒業予定者は、卒論・卒研にも勤しんだ夏でした。研修生一同、熱意を新たに秋の学びに向かうことと思います。

教師講師陣も、夏の間は、普段とは違ったペースでの働きや調整を得たことだと思います。私も日頃の禱援に感謝しつつ、招かれて各地で奉仕させていただきました。主への愛と、みことばへの熱意にあふれる同労者諸師や愛兄弟姉とのお交わりを感謝しました。

一新したウェブサイトをご覧ください

この度、聖書神学舎のウェブサイトを全面的に更新しました。積年の課題に取り組み、素晴らしい協力者たちを得て、とてもダイナミックな、動きのあるサイトになりました。その面白さは言葉で

は十分に説明できません。是非ご覧ください、大いにお楽しみください。

学舎の理念や組織に加えて、日常も垣間見ていただけます。学びに資する有益な情報や諸案内などもご利用ください。

今後の予定と祈りの課題

今年度の聖書塾は 9 月 6 日開講です。ダニエル書(小幡壘師)と使徒の働き(重田岳史師)の学びを、お茶の水で、対面で提供します。教会音楽講座(会場：東京聖書教会)は前期の学びを 9 月 30 日に終了し、11 月 18 日から後期を開講します。詳細はウェブサイトにて。

10 月 19 日には、オルガン協力会による「ソプラノとオルガンによる教会音楽コンサート」が予定されています。協力会主催の有料の演奏会です。充実のプログラムが用意されています。

11 月の恒例のオープン・デイと賛美礼拝については 8 頁をご覧ください。皆様の来訪を歓迎いたします。

最後に来年度のことです。10 月に公開する要覧で、新しい講師の先生がたを紹介します。ウェブサイトをご覧ください、先生がたのために、送り出してくださる教会のために、主への感謝ととりなしの祈りを願います。

伝道者として主の召しにこたえて立つ人々が起こされるように、祈りを合わせましょう。日本でも世界でも必要は多大です。恐れも不安も主に委ねて、人生を主に明け渡す幸いを、直接献身というかたちで経験する人々が、大勢起こされますように。

聖書において独特の意味で使われる、いわゆる「聖書語」は様々な過程を経て日本語に翻訳されていく。その中に、従来から日本語にある程度使われていた言葉が、キリスト教の影響により、意味に大きな変化を加えられる場合がある。例として、神、悪魔、愛などが挙げられる。

ここでは、「神」に注目したい。中国では英語の God を「神」と訳すか「上帝」と訳すかを巡って激しい対立が生まれた（柳父章『ゴッドと上帝』[筑摩書房]に詳しい）。日本ではキリシタン時代のヤジロウ訳で「大日」、バレット写本（1591年）で「デウス」、ギュツラフ訳（1837年）では「ゴクラク」あるいは「テンノツカサ」といった訳語の混乱や修正があり、S・R・ブラウンによれば1867-68年頃には「神」と訳すことで決着がついたと言われる。しかし、その後もカトリックを中心に「天主」が使われたり、明治期には「神」を用いることによる伝道の困難もあったようである。議論は今日もなお続き、鈴木範久氏は「最善ではないにせよ次善」として「天主」を推し（『聖書の日本語』[岩波書店]）、また「創造主」の使用を推す人々もいる。

しかしながら、種々の見解がありつつも、日本の国語辞書にはすでにキリスト教の神観が定着している。日本最初の近代的国語辞書と言われる、大槻文彦著『言海』（1889-91）には「神」の項目はあるが、キリスト教的な説明はなかった。しかし、上田萬年・松井簡治共著『大日本国語辞典』（1915-19）には「神」の5番目の語釈として「基督教にて、宇宙を創造し且つ支配する全智・全能の主宰者。上帝。天帝」とある（ちなみに、明治元訳の刊行が1887

年、大正改訳の刊行が1917年である）。1932年の『大言海』では「神」の項目に「（一）形は、目に見えずして、霊（みたま）あり、幽事（かんごと）を知（しる）して、奇霊（くしび）にましますものの称。…（中略）…耶蘇教にては、宇宙を創造し支配すと云ふもの」とある。その後も日本語の「神」の中に聖書の神はその位置を確保し、広辞苑第七版（2018）でも「神」の6番目の語釈にキリスト教の神は記されている。これらは、主のご摂理と、また「聖書語」を翻訳し、聖書の神の伝道に身命を賭してきた多くの先達の労によることである。

言葉を巡るこのような「戦い」は、聖書の時代から繰り返されてきたことである。ヘブル語の神「エル」はセム語一般で神を表す語であり、ギリシア語の「セオス」も同様である。神名だけではない。たとえば、救いの事実を表す「子となる」「相続する」といった言葉は、当時の法律用語が聖書の中で新しい意味で使用された。聖書の著者は神や救いを知らせるときに、新しい言葉を造語するのではなく、それまでにある言葉に新しい意味や内容を持たせて使用することが多い。

日本でも「神」という言葉を用いるからこそ、コミュニケーションの接点を作ることができるのではないだろうか。「天主」や他の語を当てるのでは、一見日本の神と区別して伝道しやすいように思われて、しかし日本語の「神」と接点を失うことになってしまう。神学生時代に恩師から、同じ言葉に違う意味を持たせて使うことが伝道であり、それは「意味論的戦い（semantic warfare）」を戦うことだと教えられたことを思い出す。

夏期研修講座の報告

横山 昌英

Masahide Yokoyama

聖書神学舎 教師

リクエストと昨今の情勢を踏まえて、「聖書から考える終末」の主題の下、教師たちによる以下の講義を参加者 64 名が熱心に学びました。

講義 1 は赤坂先生による第二テモテ 3 章 1-9 節、講義 3 は伊藤先生によるイザヤ書 2 章 1-5 節の「終わりの日」を軸とする考察です。初臨から再臨に向かう終末の時代、人間の現実と歴史にどう向き合うべきかを新約と旧約それぞれから学びました。この間、若井先生による講義 2「教会史の中の千年王国」があり、千年王国観が人類の歴史に良くも悪くも多大な影響を与え続けていることが提示されました。

講義 4 は田村先生によるダニエル書 7 章です。「第四の獣」のローマ説を踏まえ、神の主権に生きる大切さを学びました。同じ 9 章 24-27 節を講義 5 として鞭木先生が取り上げました。「七十週」の妥当な解釈として、起点は BC445 年、終点は再臨が示されました。

講義 6 は三浦先生。使徒 2 章 16-21 節におけるヨエル書の預言は、聖霊降臨で終わらず、再臨によって最終的に成就することが示されました。最後に横山が先の「千年王国」を黙示録 20 章から再考。再臨 (19 章) との緊密な関係、千年期の信徒に神の応答と勝利が反映していることを再確認しました。

終末に関する箇所を特定の神学や前提からではなく、釈義を通して「聞く」ひとときでした。一方時間等の制約もあり、他の重要箇所は取り上げられなかった不十分さも痛感しています。今回の学びを参考に、各自が聖書に「聞き」、聖書的終末観を構築することを期待しています。



夏期研修講座の感想

池田 憲生

Norio Ikeda

岸和田東聖書教会 牧師

7 月 1 日から 3 日に開かれた聖書神学舎夏期研修講座に出席いたしました。どういうわけだか、私は 2008 年 3 月に卒業してから、欠かさずこの夏期研修講座に出席しています。真面目なのではなく、熱心なのでもなく、なんとなくです。この度、講座を受けた後の感想を求められまして本稿を書いております。「錆びついた釈義を取り戻すことができた良い機会でした」「旧知の先生方との豊かな主にある交わりを楽しむことができた」と言えば正解です。事実その通りの感想を私も抱いて今年も講座を終えることができました。心から労してくださった先生方に感謝申し上げます。

錆びついた釈義の力を取り戻すことは個人的にはできませんでしたが、今年は終末論を取り上げてくださり、ある程度終末論について整理ができました。千年期についてのそれぞれの理解の仕方について、ご講義や先生方の会話の中で改めて共有されたことが大変有益でした。私は年々頭の回転が鈍くなり、先生方の難しいご説明が理解できなくなりつつあります。ですから、またいただいたレジュメを見返す機会も持たなければ、と思わされています。この講座のために労してくださった教師の皆様、事務方の皆様、また奥多摩福音の家のスタッフの方々のご労苦をも覚えて感謝いたします。体調をくずさなければ、私は来年も行くことになると思います(強制的に行かせられる?)。その節はどうぞよろしくお願いいたします。

第 39 回教会音楽夏期講習会を終えて

石川 由紀子
Yukiko Ishikawa
聖書神学舎 講師

7月24日(水)～26日(金)の日程で聖書神学舎において、教会音楽夏期講習会が行われました。参加人数は20名、その内初めての参加者は7名。主催者側の事情でプログラムに若干の変更がありましたが、参加者の皆様の健康も守られて無事に終えることが出来ました。

今年の教材はJ. S. Bach作曲のモテット「Jesu, meine Freude BWV227 イエス、わが喜び」でした。モテットの巧みな構造(6節のコラールの間にローマ8章の聖句が置かれ歌われる)や音型の意味、同コラールを元に作られたオルガン曲等を学びました。「礼拝学」と「人間論」、「イエス、わが喜び」に用いられている聖句「ローマ人への手紙8章1-11節の聖書講解」の講義により、さらに理解が深まったことと思います。講習会最後の閉会礼拝は必然的に、みことばの説教、ふさわしい応答の賛美、みことばを思い巡らすことのできる前奏・後奏曲など、講習会を総括するようなプログラムとなりました。

今回のモテットは難しい合唱部分を聖書朗読に置き換え、コラールを単旋律で歌うことにより、どんな教会でも用いることが出来ます。短い期間の講習会ではありますが、これからもみことばの豊かさに満ち溢れる学びを目指し続けたいと思います。



関口 泰子

Yasuko Sekiguchi
浜田山キリスト教会

この講座は教会で音楽に携わる奉仕をしている方20名を対象に開講されました。約2週間に一度のペースで7回に渡り学ぶことができます。

内容は聖書講義、教会音楽講義、実技、作曲です。講座の案内に書かれていた「みことばを土台とした教会音楽を学び、神に喜ばれる賛美をささげることができるよう、ともに学びましょう」という言葉どおりの講座でした。

私たちは賛美で神の栄光を讃え、賛美で互いに教えあい、賛美することで御霊によって一致することができます。賛美は礼拝に欠かせないものであることはわかっていましたが、みことばを土台にしていなければそれは賛美とは言えない、ということであらためて認識することができました。みことばを正しく理解し、心から主のご栄光をあrawす賛美が出来た時に礼拝はよりいっそう主にある喜びに満ちたものになるでしょう。

実技(私はオルガンを選びました)のレッスンでは会衆が気持ちを合わせやすいように奏楽者が気を付けるべきことを細かく教えていただきました。

作曲の講義ではみことばにメロディをつける体験をしました。みことばが自然に心に入るように日本語のイントネーションや音の高低、フレーズを意識して作ります。大変興味深いものでした。この学びの機会が与えられたことに心から感謝します。

CHECK

教会音楽講座（後期）のご案内

期間：11月18日から2025年3月3日(全7回)
会場：東京聖書教会(目黒区八雲)

gifted - 神様から恵みを受けている者として -

北崎 慎也
Shinya Kitazaki

2024年度 キャラバン実行委員長

全国のコロナ感染者数は増加傾向にあり、依然として注意は必要ですが、それぞれの教会ではコロナ以前の活動に戻りつつある、という状況の中での今年のキャラバン伝道でした。

神様から恵みを受けている者(gifted)として、教会に仕えておられるみなさまと交わり、共に奉仕することができたことを、感謝いたします。

諸教会のみなさまのお祈りと支援により、3チーム 10名の研修生は各教会へ遣わされることが出来ました。

この度、私たちを迎え入れてくださった3教会、並びにいつも私たちのために祈り、支えてくださっているみなさまに、心から感謝申し上げます。

この恵みを糧に、これからの学び、奉仕に励んでまいります。



幸いな十日間

大高 伊作
Isaku Otaka

佐倉福音キリスト教会 牧師

「本当に幸いな十日間だった。」これが私の感想です。そして、「神学生たちは神様に愛されているなあ」とも感じました。猛暑の真っ只中でしたが、彼らが外で活動を始めようすると、雲が太陽を隠し、彼らが活動を終わようすると陽が出てくるのです。そのため心配された酷暑の中での活動でしたが、熱中症になることもありませんでした。途中で風邪をひいてしまう方がおられて心配したこともありましたが、教会内外の多くの祈りがあり奉仕を全うできました。

キャラバン隊が献げてくださった奉仕の一つ一つ、とりわけみことばの奉仕や証しの奉仕、個人的な交わりによって、教会員の中にも自分の歩みについて考えを巡らした人も出るなど、本当に幸いな時となりました。これから伝道者として仕えていかれる兄弟との交わりは教会の財産です。素晴らしい交わりを与えてくださった主に感謝いたします。ちなみに、最後の片付けまで素晴らしく、まるでこれまで生活していなかったかのように去って行ったのでした。

① 日本福音キリスト教会連合 佐倉福音キリスト教会 (千葉県)

7月7日(日)–7月16日(火) 後藤優香、平田美名、岩井和基、中村言葉

「祈りの中で」 今回、主日礼拝を2度共に捧げることができたことは、とても感謝なことでした。初日の主日礼拝で子どもたちや中高生との交わりがあったことで、その後の子ども会、中高生のお泊まり会での交わりが深められました。その中で、それぞれの世代ならではの悩みや葛藤を素直に分かち合ってくれる子どもたちを通して、私たち自身もとても励まされました。

また、期間中に、1人のメンバーの声が出なくなってしまう、ということが起こりました。礼拝での証、中高生へのメッセージ奉仕を控えていた、そのような時でした。多くの祈りが捧げられました。そして、その祈りに神様はこたえてくださり、語るその日に声がイヤされたのです。そしてなんと、その後語られたみことばは、「祈りについて」でした。

さらに、前日の土曜日には「祈りにこたえてくださる神様」というテーマで2回のみことばが語られていました。これらの出来事を通して、祈りと神様の御力を経験することとなりました。主の御力をおそれ、喜び、ほめたたえます。そして、尚も前進する神のみわざを共に喜ぶ者とされたいと祈ります。

② 日本ルーテル同胞教団 酒田ルーテル同胞教会（山形県）

7月15日(月)–21日(日) 北崎慎也、原口謙、榎本芽莉

「共に分かち合う」 教会の方々に地域を案内していただくなど、多くの交わりが与えられました。皆さまの温かさに気持ちもほぐされつつ、実際に見て、お話しする中で、教会の置かれている現状をより近く知ることができ感謝でした。

一週間の中で、祈り会での証しや教会と墓園の整備、礼拝説教や特別賛美の奉仕をさせていただきましたが、特に、土曜日の子どもイベントのために多くの時間をかけて準備していきました。積み重ねてきた祈りに、私たちは応えさるのかという思いもありましたが、子どもたちが楽しく、そして、楽しいだけでなく確かなみことばを聞く機会になるようにと、主に期待し、一致して準備を進めていきました。それぞれの賜物が用いられ、子どもたちとともに主の愛を分かち合うときとなりました。

日曜の午後には、教会の幅広い年齢の方々とともに現代的な賛美を合唱するというワークショップを行いました。普段歌われていない曲調のものなので、不安はありましたが、最後には声を一つに美しい賛美となり、感動するものでした。

豊かな経験を与えてくださった主に感謝します。



③ 日本同盟基督教団 グレイスハウス教会（岩手県）

7月22日(月)–29日(月) 嘉数泉、中村瑞来、本間里辺香

「被災地での、続いていく宣教への思い」 元旦に能登半島地震が起こった今年。祈り会で強調されていたのは、被災地での長期的な支援の必要です。そんな中、キャラバン伝道の受入れ先としてお申し出を頂き、岩手県大船渡市にあるグレイスハウス教会に派遣が決まりました。東日本大震災から13年。まさに、長期的な宣教活動の場に立ち続けている教会です。

週の前半は、災害公営住宅訪問や戸別訪問にご一緒し、証の機会を持たせて頂きました。伝道の基盤となっているのは支援活動から続く、地域の方との関係性です。お一人お一人を覚え、健康を気遣い、祈り、時に言葉にしてみことばをお伝えする。福音を伝えるとは、その方へのキリストの愛を、この身を通してお伝えすることなのだと感じました。

後半は地域の子どもたちを教会に招いての1Day キャンプなど。賛美しみことばを聞く機会も与えられました。祈禱会、日曜礼拝には、週前半に訪問した未信者の方が集ってくださり、共に礼拝をお捧げすることができ喜び一杯です。そして土曜からは米国宣教チームが合流し、教会の兄弟ともお交わりの時を頂き、伝道を励まし合うひと時となりました。受け入れてくださったグレイスハウス教会、送り出してくださった諸教会に感謝して。宣教を導き支えてくださる主に期待しつつ。



● 図書館だより

鞭木 由行

Yoshiyuki Muchiki

聖書神学舎 研究図書主任・図書館長

私が学生だった50年前と比べれば、神学舎の図書館は格段に充実してきました。さらなる充実を求めて新しい書籍を購入するように努めていますが、その際問題となるのは予算です。最近の円安の影響もあり、海外からの学術雑誌の高額化は学舎全体の経営を圧迫するようになっていきます。例えばVetus Testamentumは年々値上がり続け、年間800ユーロ(約13万円)になりました。このような高額な学術雑誌をどこまで購入し続けるかは、神学舎の図書館が教育用の図書館を目指すか、あるいは研究用の図書館を目指すかにかかっているのでしょうか。現在の在校生の使用現状を勘案する時、これは悩ましい判断をしなければならないところです。

その一方で、現在はいろいろな論文にアクセスできる便利なサイトが増えています。例えば、私の場合出身大学の図書館を経由してJSTORにアクセスすることができ、膨大な数の論文を無料で利用することができます。JSTORが利用可能かどうか出身校に一度尋ねてみると良いでしょう。勿論個人的にJSTORを利用することもできますが、その場合は有料になります。ただ閲覧だけならば月100本まで無料で可能です。もう一つ、Academia.eduは非常に便利に利用することができるサイトです。他にもいろいろありますが、文献を探するとき、まずこの二つのサイトにアクセスするのは良いと思います。研究に役立つ情報を得ることができるでしょう。

● 聖書神学舎からのお知らせ Information

● 「オープン・デイ」のお知らせ

11月9日(土)

オープン・デイは、授業や礼拝を公開する1日です。授業の様子を知り、小さな学びの機会としていただきたいと思います。神学校での学びを祈っておられる方々にとっても、主の導きを探る大切な機会となることでしょう。どの時間から参加していただいても結構です。申込は不要です。

(駐車スペースが足りませんので、直接車でのご来訪はご遠慮ください。)

I限	II限	10:00- 10:30	III限	IV限	昼食
8:20-9:05	9:10-9:55		10:40-11:25	11:30-12:15	12:15-
旧約各書Ⅰ (伊藤 暢人)	賛美歌学 (赤坂 恵美)	チャペル	教会史 (若井 和生)	簡単な昼食を提供します。	
組織神学Ⅳ(キリスト論) (赤坂 泉)	説教者 (伊藤 暢人)		旧約釈義Ⅰ (鞭木 由行)	時間の許す方は交わりにご参加ください。	
組織神学Ⅶ(終末論) (磯山 昌英)			旧約釈義Ⅲ、Ⅳ (田村 将)	当日の申込にて無料です。	
新約研究Ⅱ(使徒の働き) (三浦 謙)					

(時間割は当日変更となる場合があります)

● 「賛美礼拝」のお知らせ

11月30日(土) 14:30-

「私たちを生かすいのちの御霊」

聖書：ローマ人への手紙8章1-11節

説教：横山 昌英

(聖書神学舎教師、八王子キリスト福音教会 牧師)

(駐車スペースが足りませんので、直接車でのご来訪はご遠慮ください。)

賛美礼拝は、賛美のうたをもって主をほめたたえ、主のみことばを聞き、主を礼拝するときです。研修生一同、聖歌隊としての訓練を受けて、この日の奉仕に備えています。ご参加くださる皆様と共に礼拝をささげたいと思い、皆様をお誘いします。申込は不要です。